

山田邦臣先生をお送りする言葉

経済学部長 清水 貞 俊

本学経済学部で「経済原論Ⅱ」を永年にわたって担当してこられた山田邦臣先生が、来る1985年3月末日をもって定年となり本学を去られます。

ふりかえって見ますと先生は1949年(昭和24年)立命館専門学校に講師として赴任され、1954年(昭和29年)に経済学部助教授、1974年に教授となられ今日に至っております。丁度35年間立命館で教鞭をとられていたことになります。ここで先生とお別れしなければならないことは私達にとって非常に淋しく感じます。

先生の御研究はマイクロ経済学における価格理論が中心で、連関財(補完財・代替財)の需要面における変化が、そのプラス及びマイナスの依存関係を通じて多数財相互間でどのように変動するか、について、エッジワース、パレト、フリードマン、ヒックス等々の分析を手がかりにそれを深めておられます。また別の面では利子率の決定要因について、貸付資金説と流動性選好説の両者をF. H. ハーンの所説を手がかりとして和解を試みておられます。

その後先生は不幸にも胃を病まれ、発表された論文はそれ程多くありませんが、今先生の御論文を読み返して見ますと、非常に深くつつ込んだ御力作とあらためて感じています。又最近は寡占価格の理論を御研究とうかがっております。

先生は非常に几帳面な方で、教授会での小委員会の報告など、ぎっしりと書いたメモを用意してきて詳しく発言なさることで有名ですが、教室においても同様に非常に丁寧な講義をなさっておられたと聞いています。最近マルクス経

経済学のみでなく近代経済学も理論的に大きな試練に立たされており、経済理論に対する不信感が強まっている傾向があり、その反映か、学生も理論離れの傾向がめだっています。その中でミクロの価格理論は特に学生にとっては難解のようで、そのような中で先生は色々努力し、工夫されて講義してこられたと聞いております。

ここ10年程の間に本学の経済学部も特に若手の教員を中心に近代経済学の研究者が顕著に増えてきました。しかしそれ迄は近代経済学の教員が比較的少なく、その意味では学生に対しても教えるにこだわらうし、学部における他の同僚とも話しがあいにくい等の困難な事情があったらうと思います。その中で先生は、本学経済学部の近代経済学の原論を35年間にわたり教え続けてこられたことは大変な御苦労だったと思います。その意味で立命の経済原論Ⅱを支えてこられた功績は多大であります。

非常に残念なことではありますが、定年という制度のためこの3月をもって先生とお別れしなければなりません、これからも私達後輩を叱咤激励して頂きたいと思っております。永い間、有難うございました。

1985年2月